校長室の窓から

教育とは、畢竟（ひっきょう）、感化である ～ 森重 敏 ～

30 代のころ、母校の研究大会に呼ばれ、研究発表をすることに。控室となっていた共同研究室を訪れると、恩師の一人、森重 敏先生がくつろいでおられました。

一通りご挨拶をし、近況の報告をした後、

「先生、これから研究発表をしますから、ぜひ聞きに来ていただけませんか。」と私。すると、森重先生は、

「いや、わしは行かん。」と穏やかにおっしゃいました。それから、

「これから発表しようという人に言うのはどうかと思うけどなあ。あんた、教育を技術で何とかしよう思うとるだろ。」

「あっ。はい。」

「教育は技術じゃないで。」

「・・・・?」

「教育とは、畢竟、感化である。」

「出会う人とは遠くにいても出会う。出会わない人とは近くにいても出会わない。」

「発表、がんばってな。」

そう言って研究室から出ていかれました。

森重 敏。上代国文法（奈良時代までの文法）の権威で、その、研究に対する苛烈ともいえる姿勢は、数々の逸話を残しています。

まず有名なのが、『旧仮名遣いが最も論理的な日本語である。』との信念から、論文はすべて旧仮名遣いで書く。もちろん著書も旧仮名遣い。私はご著書を一冊だけ持っていますが・・・・・まあ、読みにくい。

それから、論文を書き終えたら、集めた資料を全部捨てる。一本の論文を書くためには、大体数か月から数年かけて資料を集めますから、その量は段ボール箱で数箱に。たいていの研究者は、次の論文や講義に使うため整理・保管します。しかし、森重先生は、全部捨てる。

「なんで捨てるんですか。もったいない。」と、ある先輩が言ったところ、こんなふうにお答えになったとのこと。

『残しといたら、次に書く時、これが全部先入観になる。だから、全部捨てて、同じ手間をかけてもう一回集める。そうすると、新しい発見や閃きがある。』

その時、森重先生は、すでに60 歳を幾つか超えていらっしゃったはずです。

さて、師からいただいた二つの言葉。

【教育とは感化である】

【出会う人とは遠くにいても出会う。出会わない人とは近くにいても出会わない。】

まず「感化」は受けるものであって、与えるものではない。つまり、生徒が教師から影響を受けるのであって、教師が生徒に影響を与えるのではないということ。あくまでも生徒が主体的に影響を受けるというところに意味がある。だから、二つ目の言葉、『出会う人とは遠くにいても出会う。』につながっていく。

そしてこれらの言葉を自分なりにかみ砕くと、「『この人のように生きたい』とか、『こんな大人になりたい』というふうに、生徒が思ってくれるようになりなさい。」ということだと思います。

しかし、これを達成するのは、とても難しい―― いまだ体現に至らず、というか、めども立たず。

いつだったか、息子と話をしていて、『恩師の教えを、ひとつも体現できない』という父の悩みを話したことがありました。すると彼は、

「でも、お父さん、まあまあいい線をいってると思う。」とのこと、

「まあ、よくわからんが、ありがとう。つまり・・・70 点くらい?」

「だね。」

「ふん。じゃあ、『70 点くらいです。』って報告しに行くか。」

すると、訊いてもいないのに妻が、

「そら、ないわ。自分の胸に手を当てて、よーく考えて。」だそう。（ああ、つまり・・・0点?）

ともあれ、物理的・時間的距離に関わらず、「出会う人とは出会う。出会わない人とは出会わない」というのは、人間関係の真理をついていると思います。

「あなたのように生きたい。」「あなたのような大人になりたい。」そう思われるような生き方ができたなら、それは、きっと幸せな人生なんだろう・・・。子供たちの声が消えた学校で、そんなことを思っています。